

解説・詩人論

鳥巢郁美詩選集から その生きてきたあかし

横田 英子

生の動きを見つめて引き寄せる複眼の詩人

佐相 憲一

小径を歩行し美を思索する人 鳥巢郁美詩論・エッセイ集『思索の小径』に寄せて

円環する純粹経験を詩作の文体に刻む人 鳥巢郁美詩集『浅春の途』に寄せて

鈴木 比佐雄

鳥巢郁美詩選集から

その生きてきたあかし

横田 英子

《槐》という個人誌発行者の、鳥巢郁美という名前を知ってもう随分になる。お会いすることもなく、過ぎてきている。でもお詩集を拜受している。言葉の美しさ、感性の冴え、きりりと纏めあげる巧みさには、感服していた。最近のエッセイ集でも鮮やかに四季の美しさなど感性でとらえ、言葉への執着とその美意識に感嘆していた。

『鳥巢郁美詩選集一四二篇』においても、その思いは一層に高まったことだ。研ぎ澄まされた鋭い切り口で、練り広げられる詩の層の深さにも改めて感銘を受けている。

第一詩集『距離』ではその視点を捉えて、作者の追求は止まない。詩の思いにかけて、納得のいくまで煮詰めていく。言葉と心の一致に。その始めの作品「距離」においても伺われる。そうした中で、比較的短く鋭く感性

二月の含むかたい萌芽

(終連)

と再生の力を讃える。また作品「年輪」において

齢よおいだけをのこし／生命をぬけたした樹木

(一連二行)

生のよろこびと抑圧のたたかい／充溢のなかで
くらみ謳歌した／その営みはひとつのはばになり／
冷酷な自然からおまえをまもり／冷たさのなかで空
間を所有した／その空間をひろげ／執拗な歩みを繰
り返し

(二連)

それはやがて／実りもつ生の祭典／しずまった茎内
で／輪になって／脈々と生きのこるもの達の意志

(終連)

から捉えた作品、「はにわの眼」「二匹のはえ」「落葉」なども印象深く、第一詩集とは思えない力をもった詩集。だからこそ詩の第一歩にふさわしい。

第二詩集『時の記憶』ひたすら積み上げる。詩想が溢れて、留まらない詩への追求が次ぎ次ぎと詩の層を重ねていくように感じた。即ち時の層を重ねての二歩目が。そして生きるために培う力、切り開いていくことの力、すさまじいほどの命への讃歌が伝わってくるのだ。

吸いとるために／凍らないために／その根は下ろさ
れた／荒い岩の層までとき 押し割り 傷つきな
がら／がちりとしのび込み／更に深い層へ増殖す
る

(二月の芽一五連)

(前7行略)
むくむくとわきあがっていったたくましいのち／
枝先に盛りあげたその生

(二月の芽一八連)

と、年輪に潜む歲月、時間が積み重なって起こし得る偉大さ。命への高まりの熱い作者の思いが渦巻く第二詩集。

第三詩集『原型』地球の果てしない変化を見つめ、繰り返される変動のなか、現代までのその地点で、氷河期を経ては積まれた地層への思い。それは、あらゆる地球の現象にある。その一つ一つの全てのおとになお現存し今に形をとどめることへの偉大さ。作者の深い眼差しに驚く。そして人間としての視野の広さに。私は鳥巢郁美の女性的でない、もう一つの面を見た第三詩集である。

第四詩集『影絵』その最後の作品「呼ぶ声」

綻びははじまっていった ひとつのものの解体 朽
ちてゆく日の つながりを脱け出す叫びの 扉のな
かをかけめぐる声の線束 声は幻影であったか

(一より)

冷たい生の裏側 凍結した血液のぬくみが沈んで
彼は自己の体温を知った 影は引き出されてきた

冷えびえとした祈りのなかを

彼は彼の影を弔う 忘れていた筈の生の裏側 彼の
内側で その声はいまもしきりに彼を呼んでいる

(3) より)

と、彼という人称を用いることから、次への転換を試みている。しかし従来追求している世界からも脱することができない。突き詰めてきた思いと新しい世界への渦巻く過渡期の第四詩集だと「呼ぶ声」から感じた。

そして第五詩集『春の容器』で感じたことは比較的長かった行数が短くなって、思念するところから、直感に重きを置き、自らの感性が、より生かされてきている。感性の冴えに先ず感じ入っていた私には、当然の成り行きだと思った。思想の深さは、人としての視野の広さ、情感に溺れない切り口の冴えなど、眩しく思った。そしてあくまで追求していく姿勢に感心していた反面、読む側にとっては大変なことだった。これは全く至らない読者である私の勝手な感想ではある。が、第五集では、感性が溢れる直流の表現が、きりりとその美意識とともに、

読者を魅了する。

春の容器

陽はおまえを運ぶ
その長すぎる生命を運ぶ
積み重ねた一瞬を運ぶ

異様にふくらんだ春の容器を
碎かれない炎の胃袋を運ぶ
呑み下して焼つくしたオリーブ
木の実はいつもはじけて飛び散る

赤い胃袋
おまえの呑み込んだ一個のダイヤモンドがはじける
きらめきが飛び散る

貪婪な胃袋は花火のように炸裂している

第五詩集では「春の容器」が一番短い。長い作品ももちろんあるが、その詩精神は、さらに煮詰まって読むものに迫ってくる。散文詩という世界にも作者の得意分野を發揮して。

第六詩集『背中を』は、五集をさらに変化させている。第一詩集から十六年経っている。

ひかりのなかでいくつもの静かな夢を見る
だれも通らない

小さな粒子が上がったり下がったりする日だまり
来てはならない君もおまえも
私の背なかから輪を描いて夢がのぼる

折り返んだしあわせがのぼる
午後一時がのぼる
真黒い雲のなかで逃げまどう私がのぼる
(「ひかりのなかで」一連)

執着の炎がかすかにゆらめき
色褪せた緑が揺れる

今日 その背中からやってくるのは
檜の葉の傾き
底昏い体液を流した源への道を遮り
コスモスが揺れる
微笑みを踏み
新しいのちを踏み
唯ひたすらに墜ちのびてゆく
傷口のように開いて遠のいてゆく夏の日の海
(「移ろい」三連)

背中を

わたくしの背中から何かが逃げる
かなしみが逃げる
いくつものとりとめのない宝ものが逃げる
(中略)

はなやかにあふれくるもの
わたくしを弾ませたいいくつもの宝
逃れて いま無数の小枝の内側にしまわれ

わたくしはもうただ虚空を仰いで
軽すぎる背中をゆさぶりつつける

この第六詩集では、内省の姿勢での作品に注目した。

限りないひそまりのようにどこまでも沈む／眠りは
あついふれあい／底のない出会い／ひらひらと蘇る
触手の／海のようなとめどない語らい／泡沫となっ
た瞬時を連ねて／時間のひもをあふれてゆくもの／
虚空に埋もれて傾いていた色と匂いと

(「眠りのなかに」終連)

ここから、どんなふうにも自身の体勢、その生き方の指
針を変えていくのか興味深く、第七詩集のページを開い
たことだ。

透きとおる濃色を育むように／ほろ苦い静かさを蓄
えている／紅茶を掬う／埋もれた時間を掬う／目覚
めに辿る／いくつかの傷のありか／一日のはじめに

その映えを、その輝きに感動している。作者の初々しい
姿が浮上する。

そして第八詩集『埴輪の目』から

空洞に

巨大な埴輪の

目の奥を埋めるまっくらい空

黄色い木の葉が音たて

定めのないのちは

底なしの埴輪の空をゆさぶっている

葉音のとどく不確かな世界で

朝明けに蜘蛛の糸が繰り出されるように

思念の光をわずかにたわませている

深々と重い闇に沈む

悠久の時間の横糸のなか

縺れと透ける

いちまいの絵模様が浮き上がってくる

／たっぷりと埋められた飲物／渴きをうるおしてな
お／ひろがってゆく余波／ひやひやと降りるとりま
いた霧のふるえ／谷深く黙した／にぶい痛みが漂っ
てゆく朝

(「霧の朝」)

日が移る／車座に開く夾竹桃の白／はっきりと沈む
木槿むくげの白／かすかにしなう百日紅さるすべりの白

(中略)

軒の間の径に点々とこぼれて／夏の日をつなぐ／移
りゆく日の虚ろさをつなぐ／暑熱のむこうで白い花
辨がゆれる／どこまでも乾いた空にわずかにゆれる

(「夏の径」)

とこれ等二篇からも、六、七詩集からの変化が分かる。
その心象の奥底深くを或いは、事象の底にあるものを追
求して、あくまでも言葉と感情の一致をめざし、理路整
然と構えていた厳しさに柔軟性のある、優しさが加わっ
て、霧の朝を受け入れ、夏の径に溢れる夏の花の白さに、

「空洞」の作品は透明度高く、作者の思いがしんと伝
わってくる。埴輪の眼孔が空洞に感じるということ、作
者自身の胸の内のように絡まる蜘蛛の糸を、必死に解い
ていくような葛藤のあとに見出していく心の安らぎ、そ
の安堵。

遠い日を

私はふたたび帰ってきた／一瞬のように過した年月
／星数のように膨大な言葉に埋もれて／闇に埋もれ
て／言葉だけがふくらんでいる夜更け／人と人の目
もくらむ距離／いまもまだ言葉を放って／それはと
どかない無音のひしめき

(終連)

これは文学に接し詩をかく人の多くが陥ること、人と
の疎外感に心鬱々と過ごしてしまう。だからこそ詩から
離れられないと、私は共感して味わった。またこうした
悔いがあるから前に進めるのかもしれない。

こうして歩んできたであろうひたむきな人生の縮図が浮上する。そんな時を経て、詩と共に歩む日々は第九詩集に繋げていき、詩の層は何層にも積まれ、情感のこもった作品集、第九詩集となる。

第九詩集『日没の稜線』において「曼珠沙華」

さわやかに沁みる初秋の午後に／渦巻くような曼珠沙華が揺れ／ひとつひとつの来し方が揺れ／明暗のはずれで／花茎はしなやかにたわんで／ひと吹きの風のなか／真紅の幾本かが絵図となって遠のいてゆく

(終連)

この第九詩集には、特筆すべき事件の遭遇の作品もあった。阪神淡路大震災のこと。兵庫県在住の作者にとって、いや日本国中忘れることができない。その作品。

川沿いの道

象に深い。

十一冊の詩集を、読み、それらの中に作者鳥巢郁美の膨大な記録があり、生きてきた証が、どかつと横たわっていると感じた。その存在の重さをしかと知った。筆力の確かさに加え、事象を見つめる観察の鋭さ、自然の力の美、その役割を感じし思想を重ね、男女にこだわらない姿勢で思考する姿に感動している。また、未収録詩篇で「原子力の行方は」「志半ばで散った二人の兄」「福島の大震災」と今現実の問題にも、なお批判精神の確かなことにも、教えられた。歳月を全身で受け止めてきた詩人の魂の奥深さに、心して味わった詩集でした。

川沿いの道で跡かたもない家の糸杉の生垣だけが伸び上がっている

すべてを狂わせた激震の記憶

無惨な破れを駆けた黒い叫びは

日を経てもなお川縁に立ち迷っている

見渡す街の屋並を歪ませ

一隅に庭木の緑を残して

潰つぶえ去った生活なまわ 吸いとられていた心

虚脱のままに身を寄せた地で

息をひそめて定めなく漂った数多の家族

(三、四連略)

そうした衝撃の体験も経て、「独りの棲む部屋」「繭」

「冬芽」などの第十詩集『冬芽』。

第十一詩集『浅春の途』では、「水引草が」「山懐が」

「刻み残して」「時のかけらが」等々最終章にふさわしい

作品を読み味わった。また散文詩も多く「語らいの

刻」「花影を踏んで」「放つとき」「宿り木の譜」など印

生の動きを見つめて引き寄せる複眼の詩人

佐相 憲一

詩を読むことで何かが受けとめられて、吹いてくる風が生を再確認させてくれるということがある。

似たようなことは詩を書くことにもあつて、くもった何かが書くことで見晴らされ、空洞に何かの実感が通つて行くような感覚になつて、生が見えてくるのだ。

第一詩集『距離』（一九五九年）に鳥巢郁美さんは「はにわの眼」という詩を書いている。詩人のマニフェストのような重要性をもつ作品で、三十五年後の第八詩集『埴輪の目』（一九九四年）の詩集タイトルに復活させている。

はにわの眼

わたしは
はにわの眼のように

おびただしい霧がとおつても

くつきりとときりとられた

はにわの眼は

いつも乾いていた

はにわの眼がぬれないように

わたしの眼も

おびただしい涙の中で

うるおうことが出来ない

（詩集『距離』より）

見つめて見通す「はにわの眼」の詩世界。地球物質でつながる生の動き。鳥巢郁美さんの詩には内面と外界が二重写しになっている。細部まで書き込まれた繊細でダイナミックな刻印には、存在のふるえや、生の問いかけと対話が息づいている。詩的な複眼によって、動いている生の実態を奥からつかみとつてとらえ返し、内省によって深められた思念と結んで表現しているのだ。

物理化学や生物学などの科学的観察批評眼と、奥の見

何もかも吸い込んだ

わたしの行方にあるものに

ひとつずつ

急な速度で

近づいていった

はにわの空間が

無限につながつてゆくように

わたしの心も

常に

限りなくひろがつてしまふ

はにわの眼のように

いつも開いていなければ

がらんどうの空間になるから

わたしの眼は

またたくことが出来なくなった

えない領域を大切に感じとり精神的に表現する「詩の心」が、美しく溶け合つた文体は鳥巢郁美さん独自のものである。現代詩の病理ともなつた暗喩地獄とは一線を画し、わけの分らない自己満足の暗喩に溺れるのではなく、内面と外部のそれぞれの実相を記すことがすなわち双方の暗喩にもなつているという、類まれな複眼である。

第三詩集『原型』（一九六二年）はそうした鳥巢郁美さんの詩世界がいよいよ開花して、命の本質の動きを的確に表現したすぐれた詩篇が目立つ。一篇引用しよう。

染まる

空がしだいにせばめられてゆく、わずかに芽ぶいたけやきの大木を浮かして、梢のところどころを気紛れにほころびたそれら新芽の、ういういしいあおさが毒気のように目のなかにしまい込まれる。闇に包まれて、萌え出るものの歓声のうずきが、まぶたのうらではねかえっている。若さをどこに誇ろう

あたりいぢめんの星雲のすきまでまぶたを開閉させてゆく日 とりとめのない夢のように出沒する季節を 錯綜するうぶ声の乱れを 繰りごとのような老いの秘密を

ひとつの生の終りは編み出していた 結合の神秘 開かせねばならない葉柄達の その暮色の希い 茜色の空から 何が生まれ出よう 一瞬のうつろいをかざして けれども人々は知るのだ 朱の海底 色彩に埋められた広場の その片隅の所有された時間の断片 空漠を埋めるいくつかのトーンを 空高く舞いあがるものよ ひと色を選んで 色彩のなかから胸踊らせる瞬時の ひとときをわななかせていった 空を塗りかえ それは和音のように選ばれてくる 光束のなかから 人々の胸を染め 梢を染め 空白を染めるそれら単色の芽ばえを 夕暮の頭上の そこには色達の しんしんともえるような合奏がはじまっている

(詩集『原型』より)

たひそやかな声を情景に託した作品群で、『原型』と対になった好詩集と言えよう。作品「晩秋」を全篇引用する。

晩秋

秋が了る 野の色も了る 部屋の中にはストーブが輝いていた。燈色は激しくさまよい 炉の中でそれはゆらゆらと蘇っていった。生命をひきついでいたのか またたきもなく ほの白く化石してゆく焔を包んで それらかけめぐるものは何であったか 了らない夢を燃やして 外にはいぢめんの曠野が拡がり 野の果てをとぼとぼと歩んで いくつもの生命が墜ちていった。深い谷間を擁して 土が盛りあがってゆくとき 谷底をかすめて 叫びであったか ほそぼそと反響する冷たい気流に埋められ 喪われたものたち 色彩を没してその谷底にひっそりと 積まれてゆく夜。

この第三詩集『原型』には長い詩が多く収録されている。水に絡めて関係性を問いかけ、命の声がとぼしる名詩「隔絶」、地球や宇宙の自然界の劇的な動きに人間と歴史と個のこれからをさぐった大作「明るい夏の日のために」、花を見つめて生そのものを見つめる「ひまわり」、それらすべてを総合したような生の本質の長詩で、鳥巢郁美さんの詩人生の中でも代表作のひとつといつてよい絶唱「原型」、生の裏返し of 死を深めた「海雪」など、詩句の連なりがダイナミックに命の声を伝え、地球人類の歴史を戦争・原爆なども想起させる批評性で書き、とぼしる現代抒情で書き、みごとである。長いので引用はできないが、この詩選集でぜひ一篇一篇じっくりと読んでみていただきたい。ここには鳥巢郁美さんの詩世界の原型が生き生きと躍動している。

鳥巢郁美さんの詩世界は陰影の世界でもある。命の真相、自然界や人類歴史の真相、人生感慨の真相、は影を伴っている。第四詩集『影絵』(一九六二年)はそうし

夢のなかから焔がみずうみとなつて押し寄せてくる ひとひとと打寄せる渚に けれどもそこには生棲が奪われ 灼熱の頂点が結ばれていった。

土と空と水のふれあい。二つの世界が歩みよるとき 乱舞しながら呼びあうものの 土は動くことが出来ない たわむれているのは みずうみをとおく離れて 呼び戻せない泉の それは末端でゆらめく態であった。

泉よ いま暮れようとしている季節に 生命があかあかともやさされている 炉の中にはじけて更に白熱するのだ ひとつずつ核にとどいて 了るために 装われないのちを 空と水がたわむれる渚にむなし いふれあいが繰返される。一瞬の幻影のように焔は過ぎ去っていった 空と土の交歓のひとつとき 陽の源をたぐって近づいてゆくのだ 輝くものを 了らないのちを 希いであったか。焔よ 一瞬と一瞬のすきまで 核芯は常におおわれている 枯れ朽ち

た野の色のようにならば、それら灰色に埋められた匂いの奪われた棲家に、すべての生が黙してゆくとき。

〔詩集『影絵』より〕

げて、わずかにゆらめく焔が、奪われた曠野の一隅を際立たせてゆく。

篝火はしずかに燃えていた。野の一隅に沈んで、営みを終ったものたちの眠りに、ゆつくりとかぶさつてゆく焔の、燃えつきるのは、蓄えた生棲の日は、げしい乱舞の証しにも似て。陽のなかで炸裂している泉のようにつきない焔を、秋の野は谷間に陥ちこみ、喪った季節の重みの源を手探りしている。瞬間をたたえて、その高鳴りを一角にかかげて、魅入られたひとつの生命がもえつきてゆく。秋の了りの野の果てにしるい呼吸をかすめて、山裾で灯が点在している。呼びながらぬくもりを喪い、季節はゆつくりと回転している。裸木を埋めて、野がひとつの窓に収斂する宵、すべての了りに、焔のなかでただとるとると燃えるほのおの、あつめられた希いの、闇のなかにふるえる隔てられた了りないよろこび。

眠りをこえて凍結する野に胎動のぬくもりをかか

生死の光と闇をさらに内省的な深みで表現した第五詩集『春の容器』（一九六七年）まで、二十九歳から三十七歳までに鳥巢郁美さんは五冊の詩集を世に出している。広島に生まれ育ち、大阪や兵庫といった関西で働き、教え、結婚し、育て、暮らした時代背景は激動の世の中であり、一人の敏感な感受性をもった女性が盛んに文学創造していった足跡をこの詩選集でたどることは、私たち読者にとっても大変興味深い。直接的な言葉では書かれていないが、細かい表現の中には明らかにヒロシマ原爆や戦後の社会背景を想像させるし、機械化していく現代社会の渴きと人間らしく生きることの欲求、関西などの自然に親しみ凝視する生の哲学、悩みの尽きない人の世の心の揺れ動きなどが、いま読んでも新鮮に伝わってくる。実人生の暮らしをしつかりと歩みながら、詩人は声を世に残してくれた。つきつめて書くそのひた

むきな若い声に、感動を禁じえない。

そこから少し間を空けた一九七五年に刊行された第六詩集『背中を』は、鳥巢郁美さんが一九七〇年代・八〇年代に刊行した唯一の詩集である。四十五歳、人生の充実期であると同時に不安な時期でもあろう。

前詩集『春の容器』以来八年経った。めまぐるしい変遷が私の生活にはあったが、その間、声にならない声表現を求めていたものの中から、或る部分をとってこの詩集を編む。容赦ない時間の流れに何かクロスできるものかどうか。扉をもたない吹き抜けの回廊に立つ私の軌跡に、とりこぼした筈の種子を拾ってみた。（詩集『背中を』後記より）

内と外を見つめる眼はますます健在であるが、人生経験によって内省の度を増した味わい深い詩集である。

移ろい

夜が閉じ 夏が終る
濃緑のしたたりも終る
猛々しい炎の中でうなだれていたいのちあるもの
光におぼれた隠花植物
たつぷりとした毒に浸され
白砂はじりじりと舞い上がっている
明日 その夜明けを希って
生あるものがひしめき
夏は光のなかで交替している
夜明けと共に没するであろう花々
予期しない限りあるいのちを存分に開いて
その銀嶺草に似てあわあわとした時間を
営みは濃く昏く底なしの沼のようにとめどなく続いて
て
がつくりと首を落した明け方
淡色の体液が流れる
すべてはゆつくりと回転している

動と静をわずかに踏みかえ

ためらいのようにひとつからだをゆきふる風鈴

塗りこめた音のない世界のはじまる季節

とりとめもなく語らう風も木も人も

ふいにあふれて

みずいろの体液のようにしずまっている

執着の炎がかすかにゆらめき

色褪せた緑が揺れる

今日 その背中からやってくるのは

樅の葉の傾き

底昏い体液を流した源への道を遮り

コスモスが揺れる

微笑みを踏み

新しいのちを踏み

唯ひたすらに墜ちのびてゆく

傷口のように開いて遠のいてゆく夏の日の海

(詩集『背中を』より)

この詩はさまざまものを含んだ立体画像のようだ。

まず、自然界の夏の終わりのリアルな様相。毒々しさも含んだ生の輝きと交替、めぐる季節の豊穡でなまめかしい様子が伝わってくる。粘りのあるすぐれた描写の中に、

陰りのある抑制されたリリズムさえ漂うようだ。

次に、その自然界の実相に人生のはかない情動が濃密に伝わり、歳月の遠く苦いものが切実に伝わる。

さらには、これはヒロシマ原爆をはじめとした戦争の記憶とその後社会変遷が書かれた詩でもあると強く感じさせる。〈傷口のように開いて遠のいてゆく夏の日の

海〉は少女時代の広島県の呉の海かもしれない。

あるいは、全国各地でさまざまな人生を生きている人々ひとりひとりの夏の海かもしれない。

はかないものの影と、生命実相が醸し出すものを内省する詩情と、真夏から秋への自然の無常と、歴史・人間・人生。すべてが立体画像のように詩の深みで展開される。

ここから十八年間、詩人は詩集を出していない。しか

し、詩は書き続けていて、一九八一年からは詩誌「塊」

を編集発行し続けるなど、個人生活上は闘病など大変な時期だったものの、詩の世界を深めていたと言えよう。

一九九三年に刊行された第七詩集『灯影』、一九九四年の第八詩集『埴輪の目』、阪神淡路大震災被災も反映した一九九九年の第九詩集『日没の稜線』は、さまざまな風物や土地などを季節の中に表現しながら、動いている生そのものの奥深くをつかみとった思念にまで達している。六十代のこの頃からはある種の軽みも加わって、シンプルな味わいも備わってきたようである。病気の苦しみなどを体験して眼差しがより透明になったのかもしれない。

その中に、息子さんに寄せた作品がある。

夕陽の中を

消えてゆくひとりのような病み後の夕べに

斜光のなかに息子と共に歩む

いましがたみぞれで湿った
ちらほらと紅葉の残るその道を
昏い一日に訪れたわずかな夕陽を探る
少年の殻を脱いだばかりの
若者の伸びやかな足どり
踏み出す確かな足首を凝視めて
静かにさざめく街を共にさまよっている

居並んでいたわりをひそめる横顔
空を截るむつちりと逞しい肩中
稚さを残してひきしまった頬骨
伸び急ぐ背丈をぐいと反らして
降り残るまぶしい陽の中の未知の海辺を
若者となった息子が遙かに漕ぎ出している
背負いきれない部屋の扉を叩いて
息弾ませて
一日のむこうへ踏み出してゆく

(中二の頃の息子と)

動く生を見つめてきた詩人が透徹した眼で思春期の青年をとらえているが、抑制された描写の奥に、母親の限らない愛がにじみ出ている。個人的な思いでありながら普遍的で切実なものをもつ味わい深い作品である。自ら若い頃から生を掘り下げてきた人は、次の時代の若者への眼差しも優しい。その「詩の心」には、命の伸びやかな姿に共感できる真の科学者・教育者・母親の眼がある。

二〇〇三年に刊行された第十詩集『冬芽』と、二〇一〇年の第十一詩集『浅春の途』は、達観の境地とも言える穏やかさも感じさせる詩集である。生を見つめる眼は健在で開かれており、詩人の「はにわの眼」にさらに深いところまで見通す年輪が刻まれた。そして、自然界や社会・世界の実相を表現する中に、いよいよ作者自身の人生の歩みから出てきた真実の言葉が感慨深く響いている。そこには美しくもどこかさびしいところもあって、その実感が共感を呼ぶだろう。一篇引用する。

輝きは

彗星は巨大な軌道にかけらを残す
壊れながら輝く尾を引き
かそけさを踏むごとく点在しながら
証のように擦過した細片は燃える
群なす流星の一夜の祭り

街角に吹き溜まる人の会話の
熟した歩みの 生きざまの吐息のような
線香花火の燃えがら
語り次ぐ途次の 花火の始まりと終りの
転生の道筋を視ている
生まれ出るひたすらな誘いも
没し去る畏の如き掟も

目も眩むひとときの永さを星は燃え尽きてゆく
その果てもない宙空の不可解をまさぐり

稔りある地の凹凸を駆け抜けてゆく人の
浮き沈む道程に点した熱い炎

星も生き物も輝く一端をほの見せ
幾刻か夥しい生成の熟れた果汁を蒐める
促しのような天空の彼方の永遠への意志

（詩集『浅春の途』より）

詩人は宇宙の動きに到達する。生まれて、生きて、死んでいくこと、その膨大な生命運動を見つめ続けて。

こうして、鳥巢郁美さんは長年、詩を書いてきた。そこには、「世界」と呼んでいい広大で微細な生の動きの凝視があり、それと結びついた、あるいは二重写しになった思念の問いかけがある。すべては動いているのであり、生の輝きもはかなさも影の静寂も、人間の歴史も個人の人生も、詩人がとらえる実相の奥で深められる。詩句の連なりは独自の美しさをもち、流れるようであり、冷静さを失わない透徹した批評性があり、それでいて、抑制された抒情が内省の声を伝えている。

そのような鳥巢郁美さんの詩世界は、複雑さと混沌の度を増す現代社会において、大切なものを伝えてくれる。空間にある万物とおのれの心をはじめ、時間の動きさえ見つめることが可能だと感じさせてくれるその詩世界は、生きるということを粘り強く描いてきた。ここにはさまざまな生の動きが自らに引き寄せる形で濃密に表現されている。

生の実感を失いがちないまの狭い世の中で、私はこの貴重な詩選集をひろくすすめたい。

小径を歩行し美を思索する人

鳥巢郁美詩論・エッセイ集『思索の小径』に寄せて

鈴木 比佐雄

1

一人の詩人の中で詩と散文との関係をヴァレリーが舞踏と歩行の関係に例えたことは、よく知られている。そして詩が歩行という機能ではなく舞踏という芸術であるとした。その散文の非詩的な要素を削ぎ落としたヴァレリーの純粹詩的な詩の概念が、多くの詩人たちに今も少なからず影響を与え続けていて、詩が難解なもので意味が通じなくてもいいという特権的な立場の例えの一つにされている。ヴァレリーは決して舞踏だけしか認めないとは断定的に言ったわけではないが、いつのまにか歩行を忘れて舞踏だけが一人歩きし始めてしまった。しかし私は以前からこのヴァレリーの純粹詩の概念を批判的に受け止めていないと、詩人が世界から孤立していき独りよがりになる危険性を孕んでいると考えてきた。「これは詩ではない」と断定してしまう詩人たちの根拠が実は

「舞踏」という危うい純粹詩の概念に寄りかかっているからに他ならないからだ。詩は実は歩行でありながらよく見るといつのまにか舞踏になってしまった。というように、歩行することから舞踏することへの必然性が感じられなければ、その舞踏に感動することは出来ない。実際の詩作品を読む限り、歩行と舞踏は表裏一体で切り離すことは出来ないと考えるのは私だけではないだろう。鳥巢郁美さんのエッセイ集『思索の小径』を読んでいて、私は小径を歩行しながら思索する鳥巢さんの息遣いに詩作することの根本的な意味を濃密に感じて大いに共感を覚えた。

鳥巢郁美さんはこれまで十冊の詩集を刊行している詩人だが、折に触れて詩論・エッセイを書き続けてきた。それらをまとめたものが今回初めての詩論エッセイ集『思索の小径』である。鳥巢さんの詩歴は長く第一詩集『距離』は一九五九年、二十九歳の時に出版されている。冒頭のタイトルにもなった詩「距離」は半世紀が過ぎても決して古びていないで、現在の鳥巢さんの詩作やエッセイの本質を照らし出しているように思われる。

距離

黙って耐えながら

私は時間の奥行を掘げていった

見えない時間が私の中に蓄えられ

見えない物と物の索めあい^もが

私の中で手を取り合っていた

時間が過ぎたけれども

私の時間はその度にぼうちょうした

誰にも会わない時間

私はすべての人につながっていた

物と物とはひきあっているのに

お互いを寄せ集めても

その置かれた場所を変えないように

冷たい姿勢をくずさないように

人と人が向きあったとき

人は自分の姿勢に気がついてしまう

二つの湯吞が向きあったように

自分の位置を離れることが出来ない

二つのもののあいだに隔たりがあることを

気付いてしまうのはその時だ

言葉のかけはしを渡って

私が向こうに行きつこうとしても

虹のように彩られているだけで

その上を歩くことは出来ない

確かめるように言葉にふれてみても

私の手は水の粒をつけてくるだけだ

いくら多くの言葉を投げかけても

水の上を歩くと落ちこむように

私はどこかの底へすべり込んでしまう

言葉の公式がつづるものは

細かい水の粒でしかない

そのような言葉を交わすことは

隔たりを知ることだ

言葉の橋を渡るために

私は言葉を凍らせた

そのかけはしを

びっしりと凍った水粒で埋めたい

私が

向きあつた人の方へ渡れるように

第一詩集の冒頭から、このような自らの詩論であり詩法とも言える内容を一篇でイメージ化した詩人は数少ないのではないか。鳥巢さんが自らの「時間の奥行」を内省すると「見えない物と物の索めあい／私の中で手を取り合っていた」という。そして「誰にも会わない時間／私はすべての人につながっていた」はずだった。しかし「人と人が向きあつたとき／人は自分の姿勢に気がついてしまう」のであり、他者との距離を思い知る。言葉を交わそうとしても「言葉を交わすことは／隔たりを知ることだ」つたのだ。鳥巢さんは言葉の限界やその伝達の不可能性に絶望しながらも、「言葉の橋を渡るた

めに／私は言葉を凍らせた」と願う。さらに「そのかけはしを／びっしりと凍った水粒で埋めたい」というイメージ化をして、「私が／向きあつた人の方へ渡れるように」と力強く詩作することを宣言しているのだ。「言葉の橋を渡るために／私は言葉を凍らせた」という知的な作業に裏付けられた粘り強い思索が詩作となって記されている冒頭詩に、私は深い感銘を受けた。鳥巢さんは若くしてなぜこのような詩を出発から書くことが出来たのだろうか。

2

鳥巢さんには、詩誌「衣」を主宰している山本十四尾さんが優れた文体を持つ詩人がいるとの紹介で「コールサク」をお送りするようになった。鳥巢さんも「コールサク」の詩運動に共感してくれて、詩作品の寄稿が始まった。また日頃は原爆などの社会性のある詩を書かない鳥巢さんが、なぜか二〇〇七年に『原爆詩一八一人集』の詩篇を公募した時に散文詩「原子力の行方」を寄せてくれた。その詩は冷静に原爆の威力を記しながら、

国家権力のパワーゲームによって「核廃絶」を嘲笑っている現状を絶望的に憂えているエッセイ風の詩だった。しかしそれでも核兵器は必ず廃絶されねばならないという強い信念から、新作の詩は送られてきたのだった。また二〇〇九年に刊行された『大空襲三二〇人詩集』にも呉空襲を書いた詩「橙色に包まれた街」を寄稿してくれた。

一章の「二月の雪」を読むと、鳥巢さんは小学一、二年生頃に一年半ほど戦前の北朝鮮に暮らしていたそうだ。広島・呉の温暖な暮らしと北朝鮮の寒さの中でオンドルを使う生活様式の違いは、きつと鳥巢さんに民衆の暮らしの多様性を学ばせたことだろう。鳥巢さんの経歴を見ると広島女高師理科卒業となっている。当時の理系の女学校について本人に確認すると、この学校は戦時中に女子にも理系の人材を育てるために作られた学校だったという。鳥巢さんは戦時中には呉の女学校に学んでいて、広島方向の空に原爆の光を目撃したという。戦後の昭和二十三年になって広島女高師に入学し、物理学・化学・鉱物学を包括した「物象」を学び、教師となり理科を定

年近くまで教え続けた。広島女高師は鳥巢さんの卒業後には広島大学に統合されたそうだ。鳥巢さんがなぜ冷静に物事を凝視するのは、理科教師としての視線があるからだろう。また広島女高師の学校であったことは、戦後にも続く生き残った広島市の被爆者たちの悲劇をきつと鳥巢さんは多数目撃し心を痛めていたのだろう。しかし鳥巢さんはあえてその体験を直接的には書かないで、自己の奥深くに沈潜させて、静かで思索的な詩篇に忍ばせてきたのかも知れない。

『思索の小径』での冷静な筆致のリズムの根底には鳥巢さんの詩人としての情熱が底流していてその絶妙なバランスが文体の魅力成形している。例えていうならば哲学者スピノザは神に酔える人と例えられるが、鳥巢さんの文章を呼んでいると、硬質な文体の中にも美意識という詩神に酔える人のように感じられてくる。鳥巢さんには理系と文系が矛盾することなく共存していて、リアリズムとロマンチズムが銀貨の表裏のように重なっている。一章「御影の頃」の鳥巢さんの視線と歩行の息遣いを引用してみる。

少し降りると、電車の踏切を渡った辺り、開設したばかりの香雪美術館の杜で、小葉楓の丈高い枝が伸びて、アーチ状に続く道があり、家の西方からの、駅に向う蘇州園に沿う小道は、さし交わず枝で夏でもひんやりした、塀と石垣に挟まれたその一丁ばかりも疎水に沿い、なんとも落着いた佇まいを持つている。思索の小径と私はひそかに名づけて、朝夕歩いてきた。魚崎の前六甲道に居た頃、白鶴美術館を訪れた折に歩いて、心惹かれた道を、はからずも毎日通うようになった。人の成りゆきは分からぬものである。市道の水洗化で、天然石の川床が人造石になつてからは、以前の趣も半減したのだが、秋には街中木犀がどこからともなく匂い、冷え込む頃になると真赤な楓が散り敷き、流れに落ちていてはとさせる。ふり仰ぐと、高々と陽に透いて、沁みるように色づいた枝が交わされている。桜は個人の家の各所にも相当の大樹があつて、どちらの道から行つても見事である。西には深田池、東には公園墓地が

れている花や木々に寄せる美の文化が存在していることは確かだろう。たとえ政変・戦争・地震等の天変地異があるうとも、「どんなにせかせかと危機に陥つていても、間違ひなく季節はめぐつてきていた」と言い切れる美意識が鳥巢さんの文体に宿つているように感じられるのだ。

なぜかこの「御影の頃」の文章は散文を読む愉悅を感じさせてくれ、何度読んでもはっとするような趣があり、鳥巢さんが毎日通いながら次第に親密感をまし、その魅力を心地よい描写で刻んでいる。「思索の小径」とは、街の表層である広い道路ではなく、街の深層ともいえる裏側の町に多方向にはりめぐらされている小径を歩きながら、ゆつたりと考えることの重要性を暗示している。家々の植木や石塀、街路樹や疎水沿いの小道を見ながら考えることは、脳の潜在能力を活性化させ、豊かな発想を溢れさせるだろう。鳥巢さんが考えるとは、日々自分にとって大切な時間や場所を持ち、そこで小さな自己を開放させて、他者の創り上げた暮らしの中の美を賛美することのように思われる。

鳥巢さんは街の中に様々な美を発見する。その美を求

又いちめんの桜で埋まる。京都にはしだれ桜の頃出掛けるが、ソメイヨシノは殆ど自宅の囲りで堪能できる。こうなると今度は、吉野の丈高い山桜の連なる、閑雅な華やかさに接したい等と思う。／＼その年の三月上旬、市道水洗化を機に、庭というのもおこがましい程狭い玄関前だが、魚崎のマンシヨンの庭を手掛けられた、感覚のいい造園家に何とか格好をつけて貰つて、心配りのきいた小庭が出来ていた。昨年大鉢に植えておいたアネモネが、見事に花を咲かせたり、楓が赤い芽を吹いたり、樫がいつせいに新葉をつけたり、人がどんなにせかせかと危機に陥つていても、間違ひなく季節はめぐつてきていた。

私はこの箇所を読むたびに、奈良時代の頃から千数百年も続く桜などの四季折々の花々や木々への民衆の暮らしを支えた美意識の原型を感受するような心持ちになる。もちろん日本列島の歴史は広く深いので、弥生文化だけが日本文化の基底とはいえない。

しかし近畿地方の根底には鳥巢さんの深層に刷り込ま

める精神がこの散文をなだらかに読むものの心に湧水が流れるように沁みてくるのだ。人の歩く速度で美は発見されなければならぬ、と鳥巢さんの散文を読んでいると思われてくる。人が歩く肉体の速度こそが人がものを考える根本的な速度ではないのか、そのことを忘れていけないと一章の十五編のエッセイで鳥巢さんは語り続けている。

鳥巢さんの暮らす西宮市仁川も阪神淡路大震災に遭つた。被害も大きかったそうで、近所で亡くなつた方もいたという。詩友であり抽象画家として高名な津高和一の絵画を詩集の多くの表紙画に鳥巢さんは使用している。津高和一は神戸の震災で亡くなつたそうだが、本書でも鳥巢さんは津高和一の絵を使用したいと語つた。津高和一の抽象絵画と鳥巢さんが無言の対話をしていることが分かる。その震災後の街並みのことを綴つた「秋の足音」もさりげなく不屈の人々の生活感が出ていて心強く感じるが、「雑草のある暮らし」も鳥巢さんの野草の命を見詰める視線が奇跡を見るような驚きに満ちていて、純粋な精神性を感ずることが出来る。

二章「論説」十編では本格的な詩論・芸術論・自我論・教育論・政治権力論・平和論が書き記されている。鳥巢さんの「論説」は思索のプロセスが生々しく辿ることが出来る。鳥巢さんは感じるように考えることが出来る人なのだ。その生々しい思索の痕跡を辿ることが鳥巢さんの文章を読むことの恵みであるだろう。詩論を紹介するには、「誘いの径」が最適だろう。

ものを書くということは、疎通への意志を紙面にのせることである。個々の肉体、個々の感覚をもった人間同士が編み出した、言葉というまことに窮屈な代物を通して、何かを語りかけることであろう。相手はどこにいてもよい。唯生と生のあいだに通じあわせる媒介物があるからには、それを組みあわせることよって可能な限りその制約を乗り越え、他者の精神内部へ行きつこうとする何等かの意志が働くとき、人は自然に言葉の組み合わせを考えるように

ある」と洞察している。したがって詩人、文学者、芸術家たちはある種の「感動の深さ」を競っているのだとい切っている。鳥巢さんにとつて美意識こそが言葉を生み出す初源の力であることを確認することが求められていたのだろう。その意味では詩とは、美意識と詩作との緊密感が織りなす試みであることを根幹に据えているのが鳥巢さんの詩論なのだ。そして次のように詩的言語の意味を括弧している。

詩心が詩となるために使う言葉が別の機能をもっているとするれば、音楽が語りえない何か展きえない何かを、言葉はもってはいはしないか。そこまで考えてきたとき、言葉を使った詩が感覚だけではすまされない何かを孕んできそうである。つまり言葉を記号として、即ち物質として扱えない宿命みたいなものがついてまわるのである。そうして又それは、言葉の特別な使命であるかも知れない。詩心が詩作品になる時に、同時に感覚が意味を内包すべく仕向けられていくわけなのであり、詩作品はその時、感覚

なる。そのような衝動があつて始めて人は筆をとろうとするのではないか。／必ずしもそれは大きな意味内容をもたなくてもよい。ひとつの美に対する、又は驚きに対する共感であつてもよい。憤りや怒りであつてもよい。勿論膨大な思考の流れであつてもよい。その源には必ず何らかの感動の泉があるのだ。ある種の感動は美であるといえるかも知れない。文芸作品が美を志向しているというのは、この感動の深さを云うことになるのだと思う。

鳥巢さんの文体の魅力は、ものを書くことの衝動の根源を自然に奏でてしまうことだ。「他者の精神内部へ行きつこうとする何等かの意志が働くとき」という発語に高まつていく精神の沸騰点を示す瞬間に、言葉が発生してくる本質を見出そうとしているのだ。その「何らかの意志」を「疎通への意志」だと明言し、鳥巢さんの視線は外界の明るみの中で人間の精神の在りかを探りながら厳密に記されている。「疎通の意志」とは、感動を伝えようとするのであることを告げ、さらに「感動は美で

だけからは幾分はみ出した分野において、詩の行為を展開してゆかねばならなくなるだろう。そこにはある種の哲学的思想も、社会意識も、充分包含されてゆく筈だし、その分野は非常に広くひきのばされているのである。(略)思考が常に飛躍して、いくつか先のことをいきなり持つてくるような表現をとる場合がある。抽象というのはそういうことで、これは絵画の場合も同様で、対象に内在するものを探るには、自然にそうなってしまうのだ。その形式も非常に個性的なもので、作者によつて各々独自の方法がとられるのだが、具象といい、抽象といい、詩においては言葉という経験用語を使って、それらがどれだけの活力をもつてくるかが問題なのであり、より深い浸透作用の美意識に高まることが大切なことなのではないだろうか。／散文の方は、順を追つて次々と叙述せねば脈絡がつかぬに対し、抽象思考をそのまま扱つても、矛盾なく可能にし得る立場をもつと云える詩に於ては、感性と知性の総和の興行を、そこに存分にくりひろげてゆけそうである。

鳥巢さんにとって詩は「音楽が語りえない何か」であり、「物質として扱えない宿命みたいなもの」であり、「感覚だけでは幾分はみ出した分野」である「哲学意識、社会意識」などが含まれてくるものに独自な特徴を置いている。具象も抽象もどちらも「言葉という経験用語」を使用して「どれだけ活力」を出して、「より深い浸透作用の美意識」に高まるかが最も大切なことであるかを力説している。鳥巢さんは詩「距離」で書いた「時間の奥行」をこの詩論でもある「誘いの径」では「感性と知性の総和の奥行」と論理的に語っている。その意味では詩作と詩論が一致している詩人で、これほどの詩論を書ける現役の詩人は数少ないだろうし、女性詩人でこのような論理的で思索的な詩論を書ける詩人は、あまりいなかったのではないかと思われる。美意識こそが人間を根源的に支えて生きる活力を生み出すことの確信を身をもって語っている詩論や美学は、多くの詩人や芸術を愛する人々を勇気づけるに違いない。一章「随想」も本格的なエッセイだが、二章「論説」も本格的な

なるのであるが、異国であったか、同胞の間にあつたかはやはり、何らかの違いがそこに生じるだろう。多くの人が既に家庭を持たれ、第二の人生が固まったかに見える。その人達の心の底の渴望の深さに胸打たれるのである。異国での逼迫した生活の中で、元敵国人の存在の立場がどのようなものであつたかを思うとき、生活の保障とは別の苦しみに追われ続けられたにちがいない。人は皆違つた地獄に直面しながら、他人の痛みをも我が身の上に重ねてゆく。地獄はまさしくこの世のものであつた。戦争もまた地獄をつくる。

鳥巢さんは地獄を作り出してしまふ人間の世をリアルに見ている。「地獄はこの世にある」という最たるものを中国残留孤児達や戦争犠牲者達に見ている。国家が近視眼的な国益のためにどんな結果を招いたか。地獄を作り出す他国を奪う戦争の悲劇を忘れてはいけないことを告げている。このような歴史認識を徹底することによって、「他人の痛みをも我が身の上に重ねてゆく」ことが

詩論であり、芸術論であり、政治・権力論だ。思索の楽しみを知る方にはこの章は刺激的で興味深いだろう。

三章「後記泡沫―『槐』誌通巻」二十三編は、雑誌に連載していたエッセイだが、いろは歌四十七文字の初めの二十三文字を通し番号代わりとして人の世の無常を語っているが、文明批評もあり、亡くなった人々への愛惜に満ちた文章などもある。冒頭の「(い)地獄は……」には、鳥巢さんのこの地上に生きるための透徹した認識が語られていて勇気づけられるので引用してみる。

地獄はこの世にある。ふつう人には断続的にやってくるわけであるが、幼くして抱えた地獄を引き摺って、戦後のかたちをそのままに周りに漂わせて、故国の土を踏まれた、中国在住の親を見失つた人達の傷跡の深さに、胸打たれぬ者はいない。戦争とはかくも残酷なものであつた。そして運命とは不可抗力のものであつた。国内にも、多くの親を失つた人達があつた。戦争で失おうと、事故で失おうと、病気で失おうと、あとの苛酷な境遇は似たようなものに

出来ないかを自問している。だからこそ人間は地上に「地獄」だけでなく「天国」を創り出していける美意識を持った存在であることを希望のように語っているのだ。『思索の小径』がエッセイを読むように触れさせ、詩論や思索の重要さを認識する人々に読まれていくことを切に希望している。

円環する純粹經驗を詩作の文体に刻む人
鳥巢郁美詩集『浅春の途』に寄せて

鈴木 比佐雄

1

二〇〇九年秋にコールサク社から鳥巢郁美詩論・エッセイ集『思索の小径』が刊行された。この本の草稿を初めて読んだ時、私はこれほど論理的でありながら感性豊かな散文を書ける詩人が存在すると知って驚いた。実際の刊行後に多くの方から鳥巢さんの思索的な文体に賞賛の声を聞いたものだった。その本の解説説文を書くために私は鳥巢さんの既刊詩集十冊をその折に読ませてもらったが、鳥巢さんは詩作に裏付けられた詩論・エッセイを同時並行的に書き続けてこられたのだということが分かった。

鳥巢郁美さんの詩の特長は、白黒で組み立てられた無機質で硬質な言語のような印象を伴いながらも、よく読むと発語した人間の精神性が、その無機質なキャンパスに多彩な色彩として立ち上がってくる深みのある独特の

立体的な文体なのだ。荒々しい世界の時空間の物質的な構造を詩の中で発見すると同時に、世界の中で小さな人間たちが、いかに精神性や感受性を抱えながら、懸命に生きようとするかを書き記してきた。鳥巢さんは広島県呉市に一九三〇年に生まれた。一時は北朝鮮にも住んだことがあるが、帰国し暮らしていた呉から広島原爆の衝撃音と光を体験している。戦後には広島女高師理科に進んで物理・化学・鉱物理学を包括した「物象」の教師となり、一九五九年に第一詩集『距離』を刊行した。この詩集を読んですぐに分かることは、二十代後半の鳥巢さんの文体が、すでに確立されていたことだ。詩集には短い詩が多いが、詩「夜の構図」はその中でも長い方の詩だ。この詩は「物象」を語りながら戦後の世界を物語っている興味深い詩なのだ。

夜の構図

みずうみを背にした 針葉樹のたわみから
沈黙が露になってしたたるように

夜がはじまっていった

幾重にも交錯した夜の敷物を浸して

露の微粒子は拡散した

敷物の空間を充たしてしまつた

乱反射の喧噪を漂わせた敷物に

露の細粒が音もなく挑み

みずうみの底へ浸していった

敷物は光の反射を定着していた

反射のない世界で沈黙がこだまし合つた

はりめぐらされた敷物のすき間を縫つて

遠い星の磁力に応えた

《時間とは何であつたか》

時間のない世界に磁力は充ちている

きまつた一点から放電が起るように

磁力の尖端はふるえている

一瞬の波動がすべて尖端になつていゝのを
その尖端との放電をなしうるのは
ただふかくふれ合うしかないのを
見極めることが出来ようか
肉を透過する磁力の湿ましさに等しく
骨の光を放つように用意されたときだけに
鋭い尖光が放たれるのではないか

(「夜の構図」の前半部)

「夜の構図」のテーマは、沈黙が支配する夜の世界の構図だろう。どんなに昼が喧騒と光が満ちていようが、夜になれば沈黙が霧の微粒子となつて支配する。その沈黙の中で人は《時間とは何であつたか》と問われることになる。そして次の連の「時間のない世界に磁力は充ちている」の意味するところは、ニュートン力学や特殊相対性理論の限定された均質な時間ではなく、一般相対性理論の重力や磁力によって影響を受ける時間や空間の在り方を示唆しているのだろうか。理科の先生である鳥巢さんは、一般相対性理論などを踏まえて磁力などによつ

て物質間での引力や斥力によって時空間を歪ませることに、何か人間同士の精神の相互影響力とも呼ぶべき特別な力を発見したように思われるのだ。そのことを鳥巢さんは「ただふかくふれ合うしかない」とか「肉を透過する磁力」とか言ってその内面の力を探っているようだ。それが「骨の光」であり、「鋭い尖光」などと言った独特の言葉に転化されたのではないか。後半部分を引用してみる。

沈黙のなかでは

余りにも多くの粒子が胎動していた

彼等は激しい転回を試みた

転回の刹那にゆきあつた 粒子達の体当りが

高まって 火花になつてゆくと云う

宿ってしまったエネルギーを

秘めるてだてのない赤熱した粒子は

とどまることが出来ない

彼等の殺到した磁極からほとぼしるものを

かっちりと受けとめる何かが

放射され 交錯した線のなかに
一つの距離と方向をもってやってくるとき
すさまじい尖光が発するだろう

星の磁力を受けとめる沈黙のように

骨の部分で放たれる尖光が 闇のうしろに展開する
だろう

みずうみの底に入った敷物から

喧噪の反射しない部分だけが光をうける

その陰画を浮かせてゆくだろう

時間のない世界にわれわれの沈黙はあつた

距離を辿つてゆくと終点がなかった

時間と距離を置き忘れたみずうみの底で

真昼のネガを透過してゆく

尖光の果てるところに

たたみこまれた闇の重さが

ひしめくように横たわっていた

(「夜の構図」の後半部)

後半部には、物質の粒子を利用する人間の「激しい転回」によって「すさまじい尖光」が生れたことを告げている。「秘めるてだてのない赤熱した粒子は」とどまることが出来ない」。これは間違いなく原爆投下のことを語っているのだろう。そのことを鳥巢さんは淡々と記述しているようだが、次の連の初めで次のように記している。「星の磁力を受けとめる沈黙のように／骨の部分で放たれる尖光が 闇のうしろに展開するだろう」。このように原爆投下後の闇の世界の後ろ側に、人の「骨の部分で放たれる尖光」が決して消えることなく耀いていることを書き記す。「すさまじい尖光」が支配する「夜の構図」は、二十一世紀の今も継続しているように考えられる。その「闇の重さ」を六十年安保闘争前に若き鳥巢さんが書き上げていたことに私は驚かされた。原子のエネルギーを発見したが、その力をすぐに大量破壊兵器として使用した人類の罪深さや人類の進歩の時空間を歪みながら「夜の構図」として鳥巢さんは、書き上げなければならぬ使命感を持っていたに違いない。

2

第二詩集『時の記憶』は翌年の一九六〇年に刊行された。その詩篇は、様々な手法を鳥巢さんが実験を繰り返して、自分に相応しい詩法を探っていたのかも知れない。その詩篇の中に鳥巢さんしか書けないであろう興味深い詩「曲る」があるので引用してみる。

曲る

真直ぐ歩いていると信じていた。それは直線でありそれは水平であり 胸一杯にひろがる平面であり 垂直にのびる空であり斜面であり どこまでも つづく放射状の 交叉することなく。

端がないのが無限だから 接している世界はすべて無限にむかつてのびると 時間を積むと別の一日が開けるように 無限とはちがった世界の積み重ねであると 日を重ねて何億年も経た地球が 同じ場

所にいてもちがった次元を形づくるように。時間がのび もとに戻ることはないから それは拋物線ではないと。時間がこれから先 どれだけ重ねられても端がないから。時間は直線に向つてのびると。時間と同じように。どんな道も直線だろうと。

拋物線がずんずんのびると。いつか弧を描いて又もとのあたりに帰ってくるので。時間が元に戻らないのは拋物線ではないと。空には端がないから。直線はどこまでものび 真直ぐ進み 一つの源から発した放射線の 無数の分離 無限のひろがりのように果てのない宇宙のなかにいると。

けれども宇宙には大きさがあるので。直線というのは拋物線で。ひとまわりしては少しずつずれてぐるぐると渦巻いている。楕円体の外まわりかも知れなくて。それならばちがった時間もやはり。楕円体の曲線のように。戻りながらまわっている。曲つてふくらむ世界だったか。

びつたり元に戻らなくても。ある日の隣りあわせに選つてくる日があるかも知れないと。隣りあわせになつても。それがあつた日にはならないのだが。それでもやはり胸のなから。放射した線のゆくえをさぐつてみるのだ。

この「曲る」という詩を読んでいると、私たちが常識的に考えている自然の背後には、不思議な自然界の法則が存在するかも知れないと感ずる。しかしその法則も一つの仮説であつて絶対的なものではない。天文学者や物理学者たちは、自然と対話し自らの仮説を思い描きながら数値化して実証しようとしているのだろう。鳥巢さんの詩は、日常感覚を持ちながらも、そんな想像を絶するような宇宙の神秘を解き明かそうとする科学者たちの精神にも肉薄しているように思える。時空間の歪みとは何か。有限と無限とは何か。そんな根源的な問いを発してしまふ人間とは何ものか。という様々な問いが溢れてくるのが鳥巢さんの詩の魅力なのだ。

3

鳥巢さんは一九六二年に第三詩集『原型』を刊行したが、その後記の初めに次のように記している。「生の原型、そして精神の原型、生命とは何であろうか。精神を操つてゆく生のすべてに、我々はいつも密着しながら生活している。個である筈の人間達、けれどもそれは絶えず拘わりつづける。生の根底にさまよい、他とのあいだに交わりをもつてゆくものは何であろうか。人々が求め、所有し、そうしてみずからのなから発してゆかずにはおれない何か、純粹認識の原型であるもの、それは愛と呼ぶべきものかも知れない。又それは愛に対置するものであるかも知れない。」鳥巢さんの詩論ともいふべき「精神の原型」が思索的に語られていて、それが突き詰められると「愛」へと続いていく発見が強く深い精神性を感じさせる。三十代前半で鳥巢さんは、物理・科学・鉱物などの物質性を通して、このような純粹な精神や生命の「原型」を詩に記そうと志したのである。タイトル詩の「原型」という詩は、オーロラと太陽の関係を探つ

ていき、そこに地球の不思議さを感じると同時に生の悲しみや「生の原型」を見てしまふのだ。

第四詩集『影絵』も同じ一九六二年の暮れに刊行されている。この詩集の最後の詩は「序章」というタイトルの詩だ。親しかった知人の死の顔に覆われていた白布が、一人の生の終わりを告げているのだが、強い日射しを受けて死者との関係を影絵のように「とおい絆」として思い起こしているように思われた。

第五詩集『春の容器』は五年後の一九六七年に刊行された。その五年間には仕事や出産などの難題を克服していったのだろう。鳥巢さんは比較的散文詩が多いのだが、三章の中に「はじまる」という短い詩がある。多くの女性詩人は結婚し子供を生み、家族のためにだけ時間を費やさざるを得なくなり、いくら才能に満ち溢れた詩人であっても詩作を断念していくことがある。鳥巢さんの場合はその出産と育児と仕事を逆に自らの詩作の重要なテーマに寄り添うものとして書き記している。またこの詩には存在するものの初源を絶えず問い辿ろうとする鳥巢さんの特長が現れているので、引用してみる。

はじまる

光と闇と小さなほのお

おまえの卵はその中に芽ばえる

胸板を蹴立てて泳ぎはじめる

じつとききをたてておまえにささやく

あの小さな生命のかげり

いつかはじまってしまったおまえを包む空しいな

かの

底知れぬ意志 くらい渦巻

おまえはもっと静かにはじまっていたのだ

渦のはじめの途方もない静けさのなかにわずかに浮

かんで

一点の浮遊する意志であつたおまえ

位置は重さ 一瞬のつらなり

ゆっくりと渦巻いたおまえをかすかに辿つて

とまどいのようにふくらんでゆく卵

子を宿し母となる母胎の生の波動が詩の韻律として転

化されたような詩だ。「おまえ」は、生れてくる子であ

り、自分の分身でありながらも、他者存在である命その

ものを包み込んでいるようにも感じられる。すべての

「はじまり」は、命の終焉を引き継ぐ命の宿りであり、

その命との対話こそが一つのリズムとなって甦るように

詩作されたのではないかと思われた。このように自己の

人生の転機を他者との関わりを広げる契機と捉えて書き

記してきのだろう。「春の容器」とは母の母胎のことを

暗示していたのかも知れない。

一九七五年に刊行した第六詩集『背中を』のタイトル

詩「背中を」は、「わたくしの背中から何か逃げぬ／

かなしみが逃げる」から始まり、内部に蓄積されていた

様々な宝ものが喪失されていく悲しみを心なだめるよう

に記している。

4

一九九三年三月に刊行された第七詩集『灯影』は十八年

奢りも貧しさも一線に立ち戻らせた

巨大な西空

運びゆく瞬時をとどめた姿の

ゆさぶるものの妖しさの前に

並び立つかぐろい点景

ぶりの詩集だった。鳥巢さんは神戸市に隣接した西宮市
仁川に長年暮らしている。六甲山やその裾の街に植えら
れている植物などに触発された詩篇も多い。鳥巢さんが
見詰める風景は、一枚の絵となったり、ビデオ映像のよ
うにくつきりと描写されて、しかも心の襞に触れてくる
苦味のような味わいを感じさせてくれる。阪神・淡路大
震災まで二年前に次の詩「陽の中を」が書かれていた。

陽の中を

沈む陽に鉄橋が浮き出している

横切つてゆく幾台かの車は

黒点のごとく

血の色に包まれ

魔の時に晒され

影絵となつて過ぎ去つてゆく

茜色に透かし見た木立も小鳥も

車と共に在ることをわずかに証す

ゆるゆると往くひと時

鳥巢さんは夕暮れの街の「巨大な西空」に「ゆさぶる
ものの妖しさ」を感じている。全てのものたちは、家路
に着くように忙しく過ぎ去つていこうとする。けれども

それを押しとどめるような巨大な力を感じ取っている。

その力が何であるかは分からないが、確かに予感してい
るように思われる。冒頭の詩「顛音」なども六甲の山懐

で鳴く蝸の顛音を「天と地に渡した豎糸の顛え」とも喩

えて、地震を予感させているところが感じられる。自分

が暮らす自然や街がどこか喪失されるような不安を抱き、

その自然や街並みを書き記していたのかも知れない。

翌年の一九九四年に刊行した第八詩『埴輪の目』にも、
身近な植物や昆虫のいる風景や旅行く風景を克明に描写
しながらその時の心情を溶け込ませている。ただ冒頭の

詩「花群」には、前の詩集にも存在したある種の予見的な詩行が見受けられる。

花 群

細枝のけむる裸木の奥に

辛夷こいしの蕾つぼみが白い

鳥のこだまやこもりあう大気をめぐらせ

いつせいに噴ふき上がるいくつもの一輪

遠ざかる枝先をかすめて

一本の白い花群は炎となつてゆらめき

色褪あせせた枯色を截きり拓ひらいている

肌寒い風のまにまに誘よわれる夏の

ぐらりと揺れ戻もす白炎のありか

呼び戻した地霊の疼いたき

目覚めた繭まゆから

羽化するごとく咲き出る時刻

この詩集が出た五カ月後には阪神淡路大震災が起き

日暮れに

ほの暗い日暮れをとろとろと歩いた

水のない川底を凝視こらめて

青いシートの連なる

挟はさまれた空間である対岸を凝視こらめて

真昼の空の乾かわきに干からびた川

ひた走る揺れにひび割れた街

敷地を露つゆわにして失われた屋並

砂をこぼす川原の様態さまの

空洞となつた心が

影法師のようにつきまどっている

虚ろに見開いた眼が

途方もない節目であつた時間を取り出し

まだ昏くらい早朝の激震のおびえと

一瞬に襲おそつた瓦解の記憶を呼び戻してゆく

底なしの

辿りきれない時間の積もる

て、鳥巢さんの家も室内は破壊され立っている状態で傾き辛うじて、家は何とか持ちこたえたという。しかし同じ並びの家では死者も出て街全体では大きな被害を残した。また詩集『原型』『時の記憶』『影絵』『背中を』『春の容器』などの装画を描いてくれた詩友であり、同じ地域の有名な抽象画家であつた津高和一が、妻と共に地震で亡くなつてしまった。このような友人・知人の死を予見したのではもちろんだらうが、「ぐらりと揺れ戻す白炎のありか／呼び戻した地霊の疼いたき」などの詩行は、鳥巢さんが潜在意識の中で西宮・神戸の「地霊の疼いたき」を察知していたような鋭い感覚が込められた言葉だつた。きつと花群を見ることは、その花を生み出す根のある土壌を見通すことになり、突き詰めると「地霊の疼いたき」を感ずることに繋がってくるのかも知れない。

鳥巢さんは、大震災の後遺症を抱える街の復興を共にしながら、一九九九年に第九詩集『日没の稜線』を刊行した。その中に「日暮れに」という詩があり、大震災後の街をさすらう詩がある。

とつぷりと暮れた街をさまよっている

私はこの詩を読んでいると、大震災にあつた人びとがその後どのような心境で生きているのかが、少し想像できる気がした。一瞬で生活していた場所が瓦解し、「空洞の心」になつてしまう。「虚ろに見開いた眼」が「瓦解の記憶」を繰り返し呼び戻してしまうのだ。そして人々が暮らしていた「辿りきれない時間」を集めながらいつまでも街をさすらつてしまうことになる。街が破壊されても、かつての街の時間は消えないで心に刻み込まれていて、失われた時間の街を現実のように追想してしまふのだらう。特に死者との思い出の場所がいたる所に存在している街の記憶は、決して消えることのない疼いたきのような痕跡となつて反復されるだらう。そのような震災を経験した心境を鳥巢さんはこの詩に書き残したのだ。

5

二〇〇三年に第十詩集『冬芽』が刊行された。春を待つ「冬芽」の辛抱強さが詩篇の中に貫かれている。曇り

空の中にもひと筋の光明を見いだす鳥巢さんの精神性が詩に転化されている。

新詩集『浅春の途』には、I章十七篇、II章十八篇、III章十六篇の五十一篇が収録されている。I章の冒頭の詩は、「埋まってゆくとき」という雪に降りこめられた風景から始まっているのだが、その下の生けるものたちは赤い血を滾らせながら耐えている。そんな雪の情景を受けて次のタイトル詩の「浅春の途」では、冬の厳しさを慕いながらも、裸木の蕾が花咲く直前に、すでに花が咲き緑葉が生い茂る風景を透視する憧れのような思いを想像している。I章の詩篇は春から夏、そして秋へと少しずつ季節が進んで行きまた冬に戻っていく四季の移ろいの円環を記している。しかし一篇の中には、一色の季節だけの単純さだけでなく他の季節の追憶が重なり、重厚な時間が詰まっている。鳥巢さんのエッセイの中にある風景描写が詩の中では、もっと密度濃く屈折しながら多様な光を放っている。

II章は、歩きながら感じ考える人である鳥巢さんの歩行が詩篇として結晶している。大地震の廃墟跡も、エー

ゲ海の旅先も鳥巢さんの眼差しは、その場所で生きる人々の影のエネルギーの動きのようなものを察知して素描してしまふ、溢れ出る表現者の業のようなものを感じさせてくれる。

III章は、最も鳥巢さんの個性が発揮される文体の散文詩群だ。様々な対象を見詰めて、その対象と対話を始めて、いつしか複雑な自分の心の髪を曝け出すように書き記している。この純粹経験のような散文詩を読むことは、貴重な未知の言語体験であるように私には感じられた。最後に散文詩「冬の終り」を引用してこの小論を終えた。「冬の終り」は「浅春の途」に円環して繋がっているのだろう。多くの人びとに鳥巢さんの詩の魅力を知って欲しいと願っている。

冬の終り

草木の精が地平で輪舞している 亡霊のように後
びく生の炎が這い延びてゆく 秘めもつたいのちの
奔放に伸びる生々とした動線の 地軸を手探って

いつか躓いた瓦礫も 裂傷を負う棘も越え 幾度となく繰返していた匍匐 生きてあるさまさまのフィルムにも写し残す 片々とした印象持つ夫々 幾日かその姿を引き連れ それは忽ちに過ぎ越す季節の足音

抗いを越える動の 旺盛に伸び互る草木の やがて枯れ枯れとなる日 荒んだその野面のはずれではやばやと首持ち上げて輪舞する精に立ち混じり亡霊のように炎は這い延び 天空の一隅で明暗の現実を操ってゆく

時を指呼する精霊と 後退く翳りであった生の残り火との どのように奥深い出会いを潜ませていたのか 泉の辺り 其処此処に薔く種子もまた 埋もれた幼卵の含みもつ いのちの焰が幻の図を織り地平を隈どる辺り 空無をなぞる動線の未だ昏い基底に 無数のひとつを紡ぎ重ねて 幾ばくか 苦み副う分厚い時の幟を立ち昇らせる